

佳作

テーマ3…多様性を認め合う社会をめざして 「あなたと共に生きるようになりなさい」

栃木県・佐野日本大学高等学校3年 川島 里菜

「できることなら、普通に生まれたかった。それだけなのに。」

ある日、大切な友人は、私にそんな悲痛な声をあげた。彼は幼い頃から忘れ物や失くし物が並外れて多く、どんなに気をつけても改善しなかった。提出物を締め切りに間に合わせることができず、小テストに向けて準備をしても、範囲や日付を間違えていることはざらだった。また、相手の言っていることを理解するのが難しく、授業を受けるのにも相当な気力が必要だった。日常会話でも、いつも相槌を打って上手く話を合わせていた。自分は人と違う、みんなと上手く付き合っていくためにはそれを隠して生きていかなければならない、そう思った彼は、これまでずっと一人で苦しみを抱えてきた。中学まで周囲は彼を受け入れず、ずっといじめられてきた。長年の精神的負担は身体にも影響を及ぼし、体調を崩してしまつことが増えた。そして先日、ついに勇気を出して心療内科に行つてみたところ、注意欠如多動症と自閉スペクトラム症と診断された。

そんな話を聞いた時、私は内心困惑した。私が今まで見てきた彼は、いつも笑顔で楽しそうに話をしてくれて、人を気遣う優しい心を持っていて、周囲の人たちから慕われていた。だからこそ、笑顔の裏でそんな苦しみを抱えているなんて、微塵も想像しなかった。しかし、改めて振り返ってみると、思い当たる節があった。学校から帰る時、バス券や財布、スマホの場所が分からずいつも焦つて探していた。私と話している時、聞き返してることがよくあった。どうして私は彼の抱えているものに気づいてあげられなかったのか。彼のためにしてあげられることはたくさんあったはずなのに。自分を責めた。しかし、友人が心の内を打ち明けてくれた今、私にできることは、それに精一杯寄り添う

ことだ。彼を受け入れて、心の拠りどころになることだ。

数日の間、彼とたくさん話をした。彼の言葉の中で、特に忘れられない言葉がある。

「自分が長い時間をかけて何度も失敗をしてようやくできたことでも、みんなにとってとは当たり前だったりする。当たり前のことすらできない自分は社会不適合で、生きていく意味がよくわからなくなるんだ。」

普通って何だろう。当たり前って何だろう。誰がそんな基準を決めてしまっているのだろうか。そんなことを考えていると、私の脳裏には以前参加したボランティアの記憶が浮かんできた。ハンディキャップを持つた子供たちとお出かけをするボランティア。私の担当の男の子は彼と同じ自閉スペクトラム症で、何かに気を取られると周りが見えなくなつてしまつたところがあった。二人で列に並んでいると、前に並んでいた女性が私たちを避けるようにあからさまに距離を取った。すれ違う人の中にはこちらを見てひそひそ何か話したり、同情の目を向けてきたりする人もいた。どうしてそんなことができるのか。とてつもなく悔しかった。同時に、身をもって感じた。友人を含めハンディキャップを抱える人たちが生きづらさを感じてしまつたのは、彼らを理解し、同じ立場に立つて彼らに寄り添える人がまだ少ないからだ。どうして私たちは自分と違う側面を持った人たちと手を取り合つことができないのか。社会は勘違いをしている。彼らが一番必要としているのは、特別な支援なんかじゃない。彼らを一つの多様性として、大切な仲間として、心から受け入れ同等に接し、必要な範囲で彼らを支援する存在だ。

昔と比べて多様性を認め合うことの大切さがたくさんの人に共有されるようになった現代社会だが、まだ改善が必要だと感じる場面はたくさん出会う。もっと多くの人が互いを尊重しあう大切さに気づき、ハンディキャップを抱える人たちが居心地良く生きていける社会になることを切に願う。同時に、これからも友人の良き理解者として、彼が無理をしなくても良いように、寄り添っていききたい。